

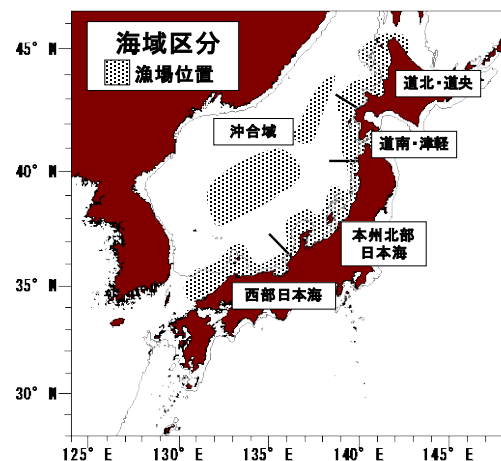


平成30年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成30年8月～12月)のポイント

- ・ 今期の全体の来遊量は前年および近年平均を下回る。
- ・ 道央・道北では前年および近年平均を下回る。
- ・ 道南・津軽では前年並で近年平均を下回る。
- ・ 本州北部日本海および西部日本海では近年同様、漁場が形成されにくい。
- ・ 沖合域では前年および近年平均を下回る。漁場は、北海道西沖で8月～11月、大和堆周辺海域で11月～12月に形成される。



* 近年は最近5年間(平成25年～平成29年)

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所

担当：業務推進部 加藤、後藤

資源管理部 森、久保田

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

平成30年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2018年8月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業

対象魚群：主に秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

1. 道北・道央（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：今期の前半は前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：8月までと11月～12月に来遊のピークがある。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年並で近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：8月までに来遊のピークがある。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：11月までは近年同様、漁場が形成されにくい。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：近年同様、漁場が形成されにくい。

5. 沖合域（いか釣り）

- (1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。
- (2) 漁期・漁場：北海道西沖で8月～11月、大和堆周辺海域で11月～12月に漁場が形成される。

* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（北海道西沖～大和堆周辺海域）。

* 近年平均は最近5年間（2013年～2017年）の平均、前年は2017年を示す。

I 予報の説明

2018年6月までの日本海沿岸各地の漁況の経過、6月中旬～7月中旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、冬季発生系群を主体とした太平洋側への来遊状況（平成30年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報）、および9月までの海況予報（平成30年度 第2回 日本海海況予報）を情報として、今期の漁況を予測した。

1. 道北・道央（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では、近年、7月～8月と11月～12月に漁獲量のピークがある。前半は秋季発生系群が主対象であり、後半は道東・オホーツク海から宗谷海峡を經由して来遊する冬季発生系群が主な漁獲対象となる。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果では、本海域の分布量は前年および近年平均を下回った。分布は沿岸域に偏って見られた。また、本海域における6月の漁獲量は、前年および近年平均を下回った。漁場一斉調査において道南・津軽海域の分布量は前年および近年平均を上回ったが、CPUEが高かったのは松山西方沿岸の1測点のみであったため注意を要する。以上のことから、今期前半の漁況は前年および近年平均を下回ると予測される。また、今期後半には冬季発生系群が漁獲の対象に加わるが、現時点では宗谷海峡からの来遊量に関する判断材料が揃わないため、予測ができない。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では、近年、6月～8月に漁期のピークがある。さらに、11月～12月には、太平洋側から津軽海峡を經由して来遊する冬季発生系群が漁獲に加わり、もう一つの漁期のピークが出来る場合がある。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査による本海域での分布量は前年および近年平均を上回ったが、1測点において高いCPUEが得られたことによる影響が大きく注意を要する。本海域における6月の漁獲量は、前年および近年平均を下回った。また、今期後半の本海域への来遊量に関する太平洋側の9月までの来遊は、津軽海峡～道南太平洋海域および道東太平洋海域で前年並、常磐～三陸海域で前年を下回ると予測されている。以上のことから、今期の来遊は不漁の前年並で、近年平均を下回ると予測される。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では、近年、5月～7月が漁期の中心で、8月～11月には好漁場が形成されない。12月の漁場形成には、海況の影響が大きいと考えられる。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査による本海域での分布量は前年および近年平均を下回った。本海域における5月～6月の漁獲量は前年および近年平均を下回った。また、スルメイカ秋季発生系群の資源量指標値（後述）は前年および近年平均を下回った。これらの結果と近年の漁場形成状況を考慮すると、今期の来遊は前年および近年平均を下回り、漁場が形成されにくいと予測される。なお、12月の漁況は沖合冷水の張り出しとの関係が大きく、現時点では来遊量を予測できない。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 本海域では、5月～6月に沿岸域を北上する群の他、10月以降に沖合から南下する群が漁獲の主対象となる。ただし、近年は10月～12月の南下群の来遊が少なく、漁場が形成されにくい。

【今期の情報と予報の説明】 日本海スルメイカ漁場一斉調査において、本海域では悪天候の影響により欠測が多く、分布量は前年および近年平均を下回った。本海域における漁獲量は5月で前年並、6月で前年を下回った。また、スルメイカ秋季発生系群の資源量指標値（後述）は前年および近年平均を下回った。以上の状況から、今期の来遊は前年および近年平均を下回り、近年同様、漁場が形成されにくいと予測される。

5. 沖合域（いか釣り）

【近年の漁況の特徴】 沖合域では、従来、6月～12月にかけて大和堆周辺海域に、水温の高い8月下旬～9月には北海道西沖にも漁場が形成されてきた。しかし、近年は漁場が北偏化し、8月～11月は主に北海道西沖に漁場が形成され、大和堆周辺海域では6月～7月および11月～12月に漁場が形成される年が多くなっている。

【今期の情報および調査結果】 日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果による本海域の分布量およびスルメイカ秋季発生系群の資源量指標値（後述）は、いずれも前年および近年平均を下回った。さらに、高密度の分布点は北海道の沿岸域に限られることから、本海域への来遊量は前年および近年平均を下回ると予測される。漁期・漁場に関する情報として、今期前半の表面水温は、近年と同様に「やや高め」と予測されており（平成30年度第2回日本海海況予報、7月6日発表）、近年同様、北海道西沖で8月～11月、大和堆周辺海域で11月～12月に漁場が形成されると予測される。

Ⅱ 予報に用いた主要な情報および調査結果

1. 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海におけるスルメイカ秋季発生系群の分布状況を、いか釣りによる試験操業（6月中旬～7月中旬に実施）によって調べた（図1）。

1) 分布状況

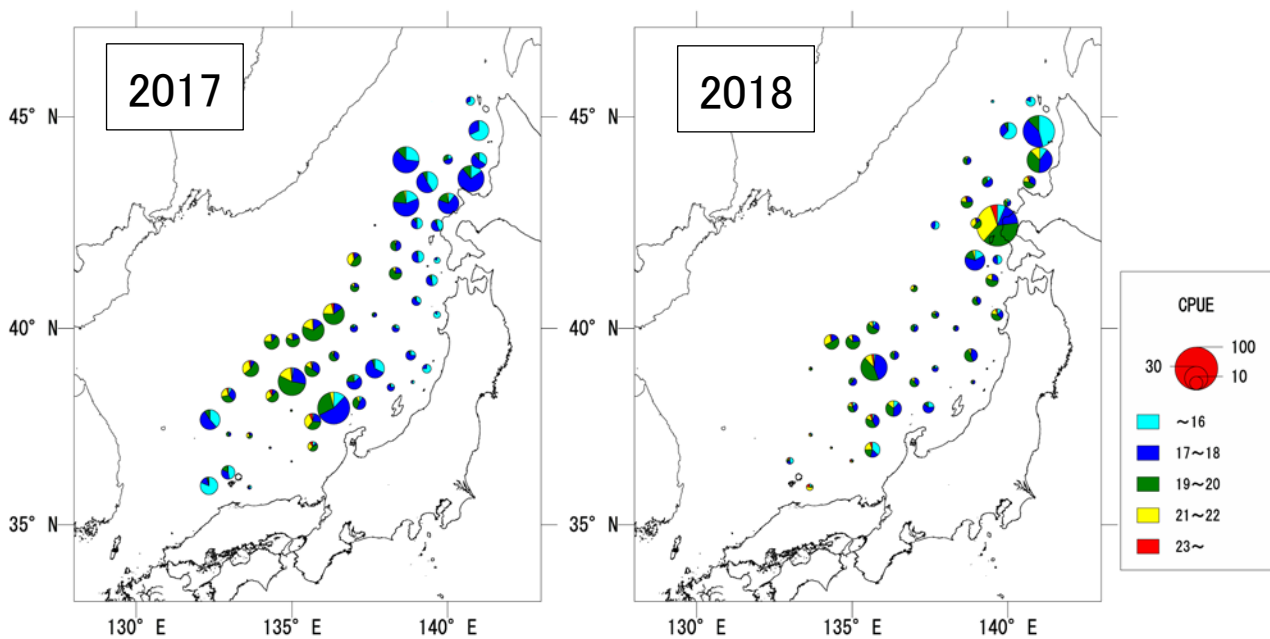


図1 日本海におけるスルメイカの分布状況（2017年と2018年の調査結果）

図中●の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）を示し、各色は各外套背長範囲(cm台)の比率を示す

- (1) 道北・道央海域では、外套背長18cm台以下の個体を中心に採集された。分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）の高い点は沿岸寄りにあり、55尾が最大であった。
- (2) 道南・津軽海域では、外套背長17cm台～22cm台まで比較的広いサイズの個体が採集された。CPUEは松山西方沿岸域で94尾、奥尻島南西沖で23尾となった点があったが、その他の点では0.2尾～9尾と低かった。
- (3) 本州北部日本海では、外套背長17cm台～20cm台の個体を中心に採集された。CPUEは最大でも14尾であった。
- (4) 西部日本海では、悪天候による欠測が多かった。外套背長は16cm台以下が主体であった。近年は、本海域での分布密度は他海域より低く、本年も同様で、CPUEは福井県沖で13尾の1点があった他は3尾未満であり、極めて低かった。
- (5) 沖合域では、外套背長17cm台～20cm台が主体で、次いで21cm台～22cm台が採集され、近年の同海域の組成と比べると小型に偏っていた。また、大和堆周辺海域におけるCPUEが本州沿岸域より高い傾向は近年同様であったが、大和堆周辺海域においてCPUEが50尾以上となる分布密度が高い調査点はなく、39尾が最大であった。

2) 資源量指標値

日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUE（釣り機1台1時間あたりの採集尾数）をスルメイカ秋季

発生系群の資源量指標値とし、これを日本海への来遊量の目安とした。資源量指標値は、1970年代後半は15尾前後であったものの、1980年代には低下し、1986年は2.76尾となった（図2）。その後、資源量指標値は上昇傾向に転じ、2000年～2002年には3年連続して20尾を越えた。しかし、2003年以降は概ね15尾前後で推移しており、20尾を越えたのは2008年（21.06尾）および2014年（28.80尾）のみとなった。2018年の資源量指標値は10.16尾で、前年（11.89尾）を下回り、近年平均（16.10尾）の63%で、1999年以降で最低値であった。

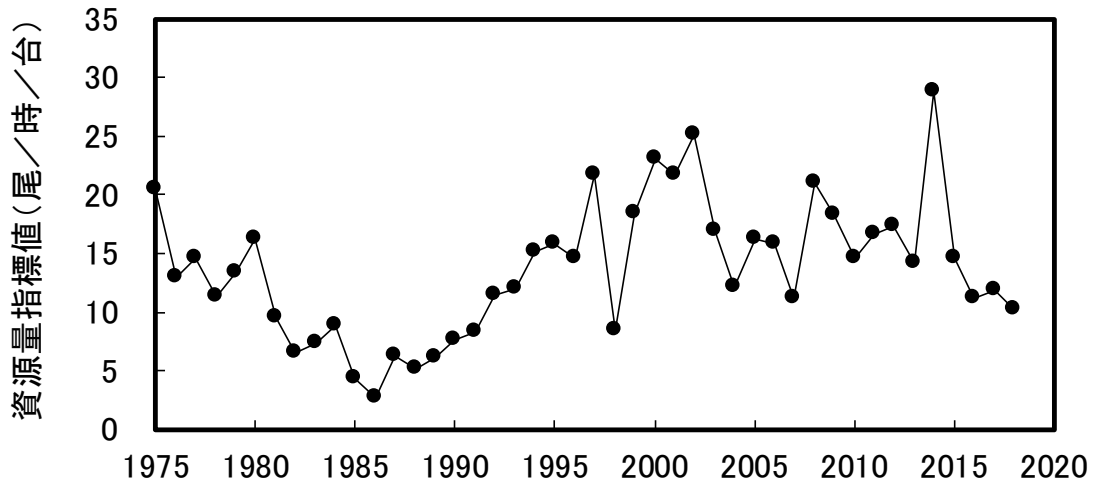


図2 日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指標値の変化

3) 魚体の大きさ

資源量指標値で重み付けした外套背長組成を図3に示す。2018年は19cm台にモードがある組成であった。外套背長のモードは前年より大きいサイズに偏っており、近年平均と同様であった。

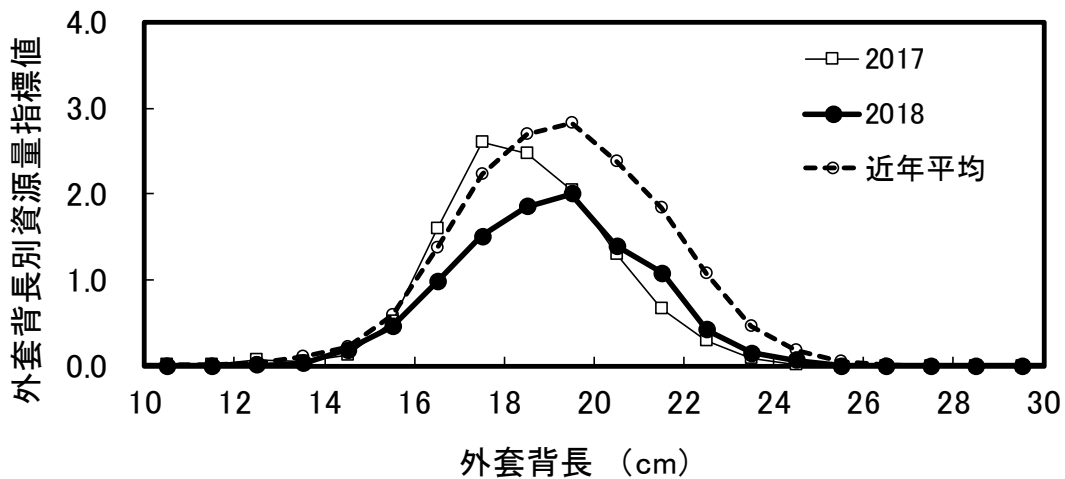


図3 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果によるCPUE重み付け平均外套背長組成
各外套背長階級の値は釣機1台1時間あたりの平均採集尾数を示す

2. 2018年6月までの日本海各海域の漁況の経過

2018年6月までの各海域の月別漁獲量を図4に示す。2018年の漁獲量（4海域合計）を月別に見ると、4月まで前年を上回り、5月以降、前年を下回った。道北・道央および道南・津軽での漁獲量は、例年通り6月から増加し、前年および近年平均を下回った。本州北部日本海での漁獲量は、4月まで前年を上回り、1月と3月では近年平均も上回ったが、5月以降は前年および近年平均の約1/2まで下回った。西部日本海では、概ね前年並で近年平均を下回った。

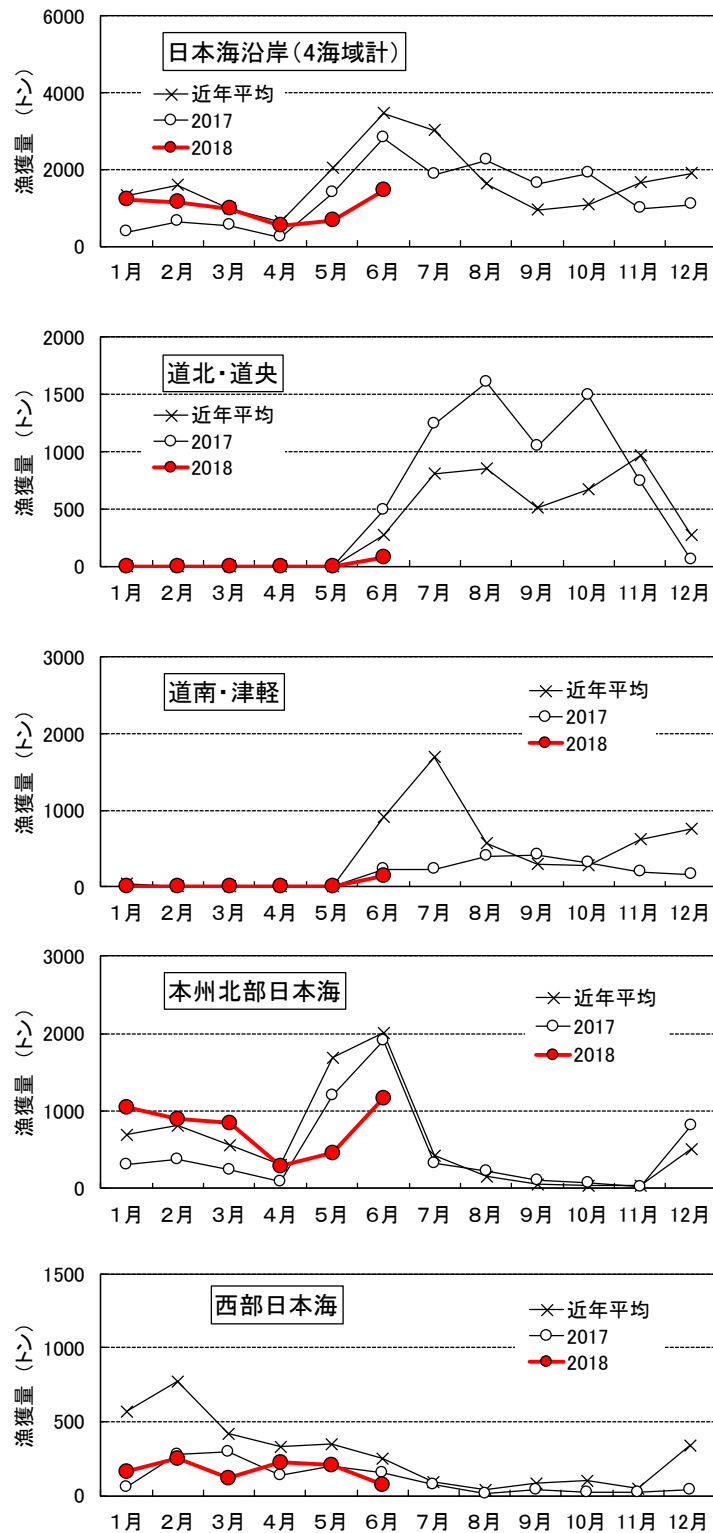


図4 日本海各海域の生鮮スルメイカの漁獲量 (トン)
各道府県試験研究機関および漁業情報サービスセンターの資料より作成 (一部未集計)

3. 太平洋側 (冬季発生系群) の資源状況

太平洋側には主にスルメイカ冬季発生系群が分布する。これらは10月以降、宗谷海峡および津軽海峡を經由して日本海に来遊するため、太平洋側の漁況は10月以降の日本海の漁況に深く関係する。

平成30年度第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報 (7月20日発表) では、8月~9月の太平洋側への来遊は、常磐~三陸海域では前年を下回り、津軽海峡~道南太平洋海域および道東太平洋海域で前年並と予測されている。

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場 函館水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産試験場	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福井県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 北海道区水産研究所
	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所